ドラマティック・ファイティング・クラブ！　（プロレス小説）

腎臓大事マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラマティック・ファイティング・クラブ！　（プロレス小説）

【Ｎコード】
Ｎ４１３３ＢＡ

【作者名】
腎臓大事マン

【あらすじ】
京都の山奥にひっそりとそびえる同心館（どうしんかん）大学。
その大学の総合格闘部を引退した個性的な面々が
伝説の鬼の先輩、蛸山（たこやま）に命じられるまま
不本意ながらプロレスラーとなり、弱小プロレス団体を
イチから、いやマイナスから立て直していく
血と汗とよだれと失笑といちご牛乳？！にまみれた青春群像。
だまされたと思って読んで、だまされてみよう！

作者の大学時代の体験がもとになっていますが、
実在の人物、事件とは一切関わりがありません。

・・・たぶん。

同心館大学総合格闘部１０代目幹部の進路

第１話　同心館大学総合格闘部１０代目幹部の進路

京都には実に多くの大学がある。
受験生や予備校の講師といえども、そのすべてを把握しているものはあまりいないのではないだろうか。
同心館（どうしんかん）という大学も、受験関係者があまり注目しない大学のひとつである。
京都と奈良の県境、とある山を切り開いてつくられたようなこの大学は、敷地ばかり広く、周囲に大学生が集まるような飲み屋もカラオケ・ボックスもなく、おまけに民家まで数えるほどしかないという田舎全開の環境にある。
ここの学生たちは、登校することを自主監禁と呼び、家に帰ることを下山、そして大学の外を下界と呼んでいるのだが、実際に足を運んでみればその表現も大げさではないと分かるはずだ。
さて、そんな同心館大学のさらに奥の奥、一般の学生なら四年間足を踏み入れないまま卒業するような場所に、古代中国を思わせるようないかつい建物がある。
武真館（ぶしんかん）。と名づけられたその建物には、空手部などをはじめとしてさまざまな格闘系クラブの道場がある。
もっともこの建物も、その存在を知る学生からは通称、牢獄やら物置などと呼ばれているらしい。
確かにこの建物の中にある各クラブの部室を見ると、ごみ箱、もとい、物置と呼ばれても仕方ないと思わされる乱雑さがある。
その物置のそばに、格闘系のクラブに所属するむさくるしい男たちが集まるラウンジがある。

良く言えば休憩室だが、雰囲気としては、朝のラッシュ時に四方を小太りで厚化粧のおばさんたちに囲まれたような、いやな熱気にあふれる空間というのがしっくり来る。

そんな場所で今、六人の男たちが放心したような顔で天井を見つめている。

彼らは総合格闘部という比較的歴史の浅いクラブに、つい今しがたまで所属していた。

今しがたまでとは言っても、彼らは別にクラブを追い出されたわけではない。

今日は彼らの引退稽古だったのだ。

彼らの放心した表情は、クラブを引退した寂しさからくるものなのであろうか。

数々の思い出が今彼らの心の中で美しく昇華しようとしているのであろうか。

残念ながらそうではない。

彼らは本当に、ただただ単純に疲れているだけなのだ。

会話の内容を聞けばそれがよくわかってもらえるだろう。

しかし彼らは、約十分間呆けた顔をしたまま誰も口を開こうとしない。

その顔つきは魂を吸い取られた老人のようであり、若者らしい情熱はかけらも見受けられない。

このまま彼らが沈黙を保ったままだと、この物語は進展していかないかもしれない。

では、いったいこの先どうなる？と、ごく一部の心やさしい読者の方々が心配してくれたであろうそのとき！

ついに一人の男が席を立った。

身長１８８センチ、体重は百キロに及ぶだろうか。かなりの大男

である。
彼はそのままラウンジの隅にある自動販売機へ向かい、おもむろにイチゴ牛乳を買った。
その場でストローをさし、一気に飲み干すと満足げに笑った。
なんとも知性的でない下卑た笑顔である。知能指数はチンパンジー以下といった風情だ。
付け加えて言うと、男性ホルモンは豊富なようで体毛が異常に濃く、ふけた顔をしている。
先ほど飲んだイチゴ牛乳が、口ひげについてピンクに固まりかけている。
それに気づいているのかいないのか、彼は口元をべろりとなめまわし、例のスケベ顔でもう一度自動販売機の前に立ち、今度はイチゴ牛乳を三本買った。
自分の席に戻ると、彼は嬉しそうにそのすべてにストローをさし、三本のイチゴ牛乳を一気に吸い上げていった。
ズルズルズル、ジュポッ？
彼の足元には空になったイチゴ牛乳が十本以上散乱している。
飲み終わると一度だけげっぷをして彼はまたもとの態勢に戻った。
どうやら行動終了のようである。
……、これでは本当に話が進まない。
この際彼らの取る意味のない行動はすべて無視して、こちらで話を進めよう。

1話（その2）

さて、たった今イチゴ牛乳を買いに行った男であるが、彼は名を元瀬敏男（もとせとしお）という。

東京生まれのフランス育ち、生意気にも帰国子女である。

しかし、日本人学校に通っていた小・中学生時代に友達はおらず、日本語でのコミュニケーションもままならないままに高校時代以降を大阪で過ごすことになる。

大阪の水が肌に合ったのか、移り住んだ家の裏がソープ街という環境が良かったのか？敏男は大阪で持ち前のオヤジ魂を開花させ、現在の性格を形成する。

躁鬱病の疑いがかかるほどの気分屋ではあるが、ハイなときにはクラブの後輩（男・二回生）を風呂場で本当に犯しかけるような明るさ？を持っている。

指まで入れられたところで、何とか危機を免れた後輩（男・二回生・１９歳）は次の日、退部した。

クラブの活動に対してはあまり熱心ではなかったが、相撲部の助っ人として同心館大学を関西一位にしたことがある。パワーには定評がある逸材なのだ。

もともと総合格闘部というのは、人員不足に悩む格闘系クラブの助っ人のためにつくられたようなクラブだった。

そのため最初はサークル的なノリだったのだが、ある男の出現がこのクラブの運命を変えた。

その男もいずれこの話には絡んでくるので、そのときに詳しく説明するとしよう。

さて、元瀬敏男の紹介だったが、もう他に面白いネタはなさそうだ。

しいて言えば、イチゴ牛乳とパンストが好きで、恋愛と政治の話が嫌いという特徴があるぐらいか。それから彼は、何かを言い終え

た後に意味不明の奇声をあげることが多いが、少年時代にコミュニケーションがとれなかったことの名残なのだろう。
同心館の中では一番学力のレベルが低いとされる工学部の学生なのだが、本当は頭が良いと言い張っており、卒業後は東大の大学院に本気で進学するつもりでいる。
もちろん他の部員はそんなことは起こりえないと思っているわけだが、一人だけ、敏男を応援するものがいる。

今敏男のとなり、六人掛けテーブルの真中の席で足を組んでビジュアル系さながらのポーズを取っている男がそれだ。
彼の名は名月純（なづきじゅん）。法学部の四回生、一浪、仙台出身。
身長１７８センチ、７２，３キロと筋肉質な割には比較的痩せ型。なかなかの二枚目、ロン毛。
なぜ敏男を応援しているかというと、彼自身、司法試験に受かるという大目標を掲げているからだ。
もっとも純の場合は、本心からではなく、この先も学生を続けたい一心で言っているだけだろう。
司法試験に受かるためにとさえ言えば、郷里の親はいつまでも学費を出しつづけてくれるらしい。地元ではかなりのボンボンだったようだ。
仙台出身だが田舎くささはひとかけらもなく、この六人の中では一番洗練された都会的な感じがする。
話す言葉も標準語で、それなりに機知に富んだことも言う。
総合格闘部員のくせに、得意種目はサッカーとテニスとバスケ、特にサッカーでは高校時代にプロがスカウトに来るほどの活躍をしていたらしい。
なかなかのナイス・ガイに思えるが、それだけで終わるようではこの六人の中には入っていなかっただろう。純にもやはり一癖フタクセ、かなり異常な性癖があるのだ。

それについて話を進めようと思った矢先、純の携帯電話が目覚し時計のような音をたて、重々しいラウンジ内の沈黙を破った。
ところが純はディスプレイを一瞥すると、応答すらせずに電話を切った。
「またか」
誰かがあきれたようにつぶやくと、純は苦笑いを浮かべた。
その表情が消えないうちにまた携帯が音をたてた。
「しつこいな」
と言いながら、電話を切る純。
そしてしばらくしてまたコール。
また出ずに切る純。
そんなことが何度も何度も繰り返された。
他の部員たちは慣れっこになっているのか特に気にした様子もない。
しかしとうとうしびれを切らしたのか、敏男が叫んだ。
「うるさいなぁ、いいかげんに電源切れよ！ウキョーッ！」
純は困ったように答える。
「オレもそうしてえけどさ、あの人から電話かかってくんだろ？」
とたんに他の部員の顔から血の気がひいた。
先程までの気の抜けた6つの顔が一気に緊張で引き締まる。
「……、あ、あの人のことは電話がなる直前まで忘れてよう」
誰かがそう言うと、みんながうなずいた。
どうやら”あの人”からの電話を待っているために、純は携帯の電源を切れないでいるらしい。
あの人とはいったい誰なのか。…ま、そのうち登場するだろう。
今は彼らの言うことに従い忘れておこう。

さて、純の携帯だが、相変わらずいたちごっこを繰り広げている。

いいかげんに疲れたのか、それともボタンを押し間違えたのか、純の携帯からかすかな話し声が聞こえた。泣き声の若い女性のそれのようだ。

仕方なく電話に出る純、にやつきながら様子をうかがう部員たち。

「ハイ、うん、オレ。……、出たくないから出なかっただけだよ。……、だって、お前と話すことなんてねえじゃん。……、うん、話してても面白くない。人生においてこれっぽっちも得にならない」

「相変わらず、ボディーにきくような会話やのう」

誰かがよこやりを入れる。

純はそれに笑顔で答えながら、電話口では真剣な声をキープする。

「あんなのウソに決まってんじゃん。……、だいたいさぁ、お前みたいなのが本気で俺みたいな奴に相手にされると思う？遊んでやっただけでも幸せに思えよな。……、うん、勝手にすりゃいいよ。逆にそっちのほうが、オレのためにも世の中のためにもいいんじゃない？……、どうぞご自由に。じゃあな、二度とかけてくんなよ！」

話し終えると純はけろっとした表情で他のメンバーに言った。

「もう、この女典型的な馬鹿。死ぬとか言ってんの」

「ひ、久しぶりに聞いたな。お前の本音、女に対する……」

慣れているとはいえ、他の部員はさすがに眉をひそめている。

もうお分かりであろうか。

この男、名月純は異様に女グセが悪いのである。

部員たちは彼の名前をもじって、女好き・不純と呼んだりもする。

おまけに純は人の心の痛みをまったく気にしない。

というよりも、人が一番傷つくような会話をするのを楽しんでいるふうもある。

サッカーの試合でも相手が気にしているようなことを耳元でつぶやいてボールを奪うことが多かったらしい。

クラブの練習はマジメに来るほうではなかったが、持ち前の運動神経と要領の良さで、空手、柔道、日本拳法など、最終的に六つの競技で黒帯を取得した。

幹部になってからの役職は会計だったが、集めた部費はすべてナンパの資金となっていったらしい。

とにかく一言で言えば人間的に問題のあるオトコなわけである。

それでも、好きな言葉は誠意と友情と真顔でこたえられる彼は、部員たちから奇妙な尊敬を受けている。

1話（その3）

携帯の一件が一段落ついたかと思うと、純の正面、反対側の席の真中にいるさらに別の大男が奇声をあげた。

「あああああぁ、名月がしょうもない電話したせいでまたあいつが出てきよる！あいつがあああああぁっ！」

と男は叫び終えると頭をたれた。

他の部員たちは、またかと言うように顔を見合わせため息をついた。

今、叫び声をあげてぐったりとなった男は、平木基樹（ひらきもとき）という。

身長は１８８センチほどもあるのだが、体重が７０キロぐらいしかないので長ネギのような印象を受けるだろう。

それでも彼はクラブに対してはかなり熱心なほうで、統制部長というクラブの監視役を勤め、各種の格闘系の大会で必ず上位に食いこむ底力を持っている。

日本酒を飲みながら男の生き様について語るのが大好きで、後輩の面倒見も良い。

顔は少しこわもてだが、どことなく愛嬌のある口元が特徴的で、男前とは言えないが決して悪くはない見た目だ。ちなみに出身は山口県、一浪している。

ここまでは特に問題のない男のように思われるが、基樹には決定的な弱点があった。

それは……。

ここで基樹はムクリと顔を起こした。

その顔つきは先ほど叫び声をあげていた様子と違って、妙に女性的でずるがしこそうな笑みをたたえている。

そして、一言。

「ちょっとぉ、聞いてたわよぉ純ちゃん。あんたいくらなんでもあんな言い方はひどすぎなーい？」

語尾を鼻声で上がり調子で読む、早く言えば典型的なオカマ言葉だ。
「いや、まぁ、オレにも色々あんだよ」
純は目の前にいる変わり果てた基樹から目をそらした。
「色々って何よぉ、アタシに説明してちょうだい！」
と言ってむくれる基樹。もとが大男なだけに気持ち悪いことこの上ない。
「それとなんなのよぉ、あんたたちシャワーも浴びないでボーっとしてぇ、くさいわよぉ、むさいわよぉ、あーっアタシもう耐えられない！」
そう言うと、基樹？は汗をかいた胴着の胸をはだけた。
「ちょっとぉ、じろじろ見ないでよ。敏男ちゃん？」
「あーっもう、うざったいなぁ。オレらは大事な電話待ってんの！」
その言葉をきっかけに他の部員たちも口々に叫ぶ。
「帰ってくれよ、レイコママ」
「帰れよ」
「元に戻れ！」
などと言い方はさまざまだが、今彼らは一様に基樹のことを『レイコママ』と呼んだ。
「何よぉ、またアタシばっかりのけものにしてぇ！」
レイコママと呼ばれた基樹が顔を真っ赤にして叫ぶ。
「大体、アンタたちの大事な用ってなんなのよ！」
真正面から睨みつけられた純が仕方なく答える。
「…蛸山（たこやま）さんから電話がかかってくるんだよ」
「ええっタコちゃん？久しぶりじゃなーイ？あたしにも話させて、ね？ね？」
その言葉に残る五人はいっせいに鬼のような顔になって声をそろえた。
「絶対、だめ！」

「ケチ、もういいわよ！ふん、二度と出てきてあげないから！」
そうまくし立てると、レイコママ、いや基樹はまたガクリとうなだれた。
「ふう、今日はまだ聞き分けよかったね」
基樹の横で会話に参加せずに笑っていた男がつぶやいた。
彼のことはまだ放っておくとして、まずは基樹である。
どうやらもとの顔つきに戻ったようだ。
「どうやった？また迷惑かけた？」
基樹が心配げにたずねる。
隣に座っている、先ほどの男が高い声で答えた。
「ううん、今日はそうでもなかった」
「お前がえらそうに言うな！何もしてへんやんけ！ムキョー」
お分かりとは思うが、敏男が言った。
「そうか、まあ、良かったわ」
と、基樹は胸をなでおろした。
「良くねえよ、この変態！」
一番からまれていた純は納得がいかないようだ。
「変態って言うな！オレかって好きで二重人格してないんじゃ！」
基樹も負けじと叫びかえす。
そう、すでに気づいた方もいるとは思うが、今基樹自身の口から説明があったとおり、彼は平木基樹の中にもう一つの人格を持っている。
それが先ほど一悶着を起こしたレイコママだ。
彼女、実は彼と言ったほうが正しいのだが、は三十代後半のお笑い系オカマ。その世界ではなかなか名の知れた存在で、二つの店のママをしている（という設定）らしい。
基樹が小学二年生のころ、お盆で遊びに来ていた親戚のお姉ちゃん（１９歳・短大生）が、家の裏にある茂みの中で弟のチンチンをいつもとは違う顔つきでいじめている（当時の基樹の印象）現場を目撃してしまい、なぜか泣き出しそうになったその瞬間。

「いいじゃないのぉ、よくある事よぉ」
と言いつつ心に入ってきたのがレイコママだったらしい。
自分の知らない大人の世界の話をたくさん知っているレイコママを妙に気に入った基樹は、それ以来彼女と精神の共有生活を続けているのだ。
不思議なようだが、基樹とつきあった人間は否応無しにそれを信じずにはいられなくなるだろう。
基樹自体この状態に慣れてしまっているようで、特に不便はないという。
ただ、集めていたポケモンのデータを消されていたときや、つきあっている彼女とひとエッチやり終えて眠っている間に現れたらしいレイコママが勝手に二回戦をしたらしく、基樹自身が目覚めたときに彼女から『二回目の、すごく良かったぁ』と言われたときには、レイコママを消し去る方法を本気で考えたらしいが、結局このままが落ち着くようである。
基樹自身はレイコママに特に不満はなく、二重人格者としては清く正しく生きているという、変なプライドを持っているらしい。
ところがレイコママに振り回される基樹の周りには評判が悪い。
純もそのうちの一人だ。

「とにかくもうオレの前には出すなよ！」と、純。
「勝手に出てくるんじゃ！仕方ないやろが」
と二人でまだ言い争っている。
もともとレイコママのことだけではなく、この二人の仲は悪い。
男の生き様を愛する時代遅れタイプの基樹は、格闘技以外のスポーツをすべてチャラチャラしとる！の一言で片づける。サッカーなどはその代表格だ。
一方、純は時代錯誤の根性論を徹底的に嫌っており、おまけに基樹の顔が生理的に嫌いなどと思慮の浅い女子高生のようなことを平

気で言ってのける。
結果、二人の間には単純な反感が生まれ、先ほどのようなことになるわけである。
「まあまあ、もうやめなよ二人ともぉ」
と、高い声が純と基樹の間を分けた。第四番目に紹介される男、志摩犬健（しまいぬけん）である。
基樹のとなりで何度か口を挟んできたのだが、声が高いのと妙に弱々しい話し方をするうえに、性格的にもおとなしいので、他の部員から相手にされないことも多い。
かといって存在感がないわけではなく、特に体つきや見た目などは他の部員たちよりもよほど個性がきつい。
身長は１７５センチと普通なのだが、体重が１３０キロ以上あるのだ。
おまけに若くして髪の毛が薄く、頭はカッパ状態となっている。
安アパートに下宿しているのだが、健康のことは気にかけないのか食生活はかなり悪いようで、その結果が顔いっぱいのにきびや吹き出物となって現れている。夏場は、そこからさらにおかしな汁まで出てくるのでさながら太ったゾンビである。
入学当初はコンタクトをしていたのだが、合宿中になくしてしまい新しく買う金もないので、今は中学時代に使っていたメガネをかけている。ただ、当時より二倍近く面積の広がった顔にかけているため、メガネが顔面にはりついているような感じになっている。
と、見た目はかなり最悪かも知れない（おまけにワキガという弱みもある）。それでも格闘家としての彼は素晴らしい選手なのである。
専門は柔道で、二回生のころ全日本学生大会の無差別級で優勝を果たしている。
一度極めた競技を長く続けてはいけないという総合格闘部の決まりごとに従い、三回生からはじめたレスリングでも練習試合でオリンピック参加選手の大学生から勝利している。投げ技やグラウンド

に関しては、誰もが認めるクラブのナンバー・ワンである。
それでも気が弱いのと、先述の見た目と、おまけに岐阜出身であるというわけの分からない理由から他の部員たちの遊び道具的存在となってしまっているのだった。
幹部になってからは、主務というマネージャー（雑用係）のようなことをしていたのだが、誰一人として健の苦労をねぎらう者はいない。
そんな環境の中でも、健は黙々とクラブのために尽くしてきた。いい奴である。

その働きぶりに神様がご褒美をくれたのか、今年の春、健に生まれて初めて彼女ができた。
そこから健は変わった。
もともと中学時代から毎日五回オナニーをすることを日課としていた彼である。
彼女ができてもそのペースだけは乱れなかった。いやある意味では乱れた、パートナーができたことによりさらに回数が増えたのだ。
彼女の方も健がはじめての男だったということで、何も分からずされるがままになっていたので、今では一日に十回近くセックスするのも普通のことだと思うようになってしまったらしい。
二人とも下宿で、歩いて二分の距離に住んでいるため半分同棲しているような感じになっており、健はクラブを休んでまで野性の本能に従うようになった。
ただ健がクラブをサボるようになったからといって、特に不便は起こらなかったため、部員たち（後輩も含む）はますます健を軽んじているとのことだ。

1話（その４）

「おい、イヌ、いつタコ山さんから電話あんねん？連絡受けたんお前やろ？」

電話を待つのに疲れてきたのか、基樹があくびをしながら言う。

「うん、練習終わる時間に合わせてかけてくれるはずなんだけど……」

申し訳なさそうに健がこたえる。ちなみに彼は、みんなからはイヌと呼ばれている。

もちろん志摩犬という苗字のせいだ。犬のように扱われているからではない、たぶん……。

「ま、あの人が約束破るのは仕方がないとして、ほったらかしにしてる後輩たちは無事かな？」

健が道場に残してきた後輩たちの安否を気遣う。

「いくら引退するときの伝統とはいえ、少しやりすぎたかな？ボ、ボク見てこようか？」

一度気にすると、ますます心配になるタイプなのか、健はさらに不安げな顔をする。

ちなみに総合格闘部では、引退式の練習で引退する先輩が、四年間で自分があみ出した必殺技を無防備の後輩たちにおみまいして技術を伝えるという伝統が根強く残っている。

「かまへんって。オレらのときより絶対甘いから。

…それにマネージャーが一応来てるやん、誰も死なんわ」

と、気楽な返事をしたのは健の向かい側の童顔の男だ。

男というより、少年といった感じのする彼の名は、沢下博（さわしたひろし）という。

地元、京都出身。１６８センチ６５キロと一番小柄。

一見すると中学生にも見えるし、女性的な顔立ちをしている。表情も柔らかだ。

が、総合格闘部では副将をつとめてきた。
相手を倒すよりも自分の技の美しさを見せつけるような格闘技を愛する彼の主な専門は、少林寺拳法とテコンドー。
少林寺では、一人で演武をする単独演武で世界大会優勝。テコンドーでも全日本選手権を圧倒的強さで優勝し、オリンピックの候補選手となったが、部の方針により辞退。大学の方からはかなりのクレームがきたらしい。
どちらの大会も、初出場でそこまでのぼりつめてしまったのだ。かなりの天才肌である。
さわやかな天才格闘家にも見えるが、しかし、彼の本性は部員たちが博につけたニックネーム”童顔殺人者”に集約されている。
つまり博は、自分がむきになることや攻撃を受けることを極度に嫌うため、実力が伯仲する部員間のスパーリングでは、自分が不利になったとたん、我を忘れたように本気で相手を殺しにかかるのである。
この博の性格を立証する事例は数多く存在するが、一番洒落にならなかったのは、これだ。
ある日の練習中に、イヌこと健に投げられて失神させられたのだが、復活後、後ろから無防備の健を襲い首をしめ（チョーク・スリーパー）、全員の制止を聞かず、彼を仮死状態に追い込んだことだろう。
ただ基本的に性格はのんびりしているというか、普段はのほほんとしており、物事を真剣に考えない軽くていいかげんな男である。
女性に関しては無理をしないタイプ。言い寄られると、美人でもおばさんでもなんでもオーケーするのだが、自分から攻撃していく方ではない。それでも歴代のマネージャーにすべて手をつけたことから、「世界一身近で手を打つ男」とも呼ばれている。
だいたい、総合格闘部にはマネージャーなどあまりいないし、来たとしてもおよそ女子大生らしくないごつい感じの女性が多いのだが、博はあまりそういうことは気にしないらしい。

今残っているマネージャーは二人いて、二人とも一応誰が見ても女に見えるので、まだましな方だといえるが、博の奪い合いで女の争いが絶えない日々らしい。おそらく負けた（または博に愛想を尽かした）方が、そのうちクラブを出て行くだろう。
その沢下博が無責任にマネージャーに全ての事後処理を押しつけようとしているのだ。
「ま、ほっとけ、ほっとけ。問題あったらあいつら（マネ2人）のせいやから」
と、笑っている。

「マネージャーねぇ、あいつらが世話すんのん、沢下だけやでなあ」
基樹が、山口弁とも関西弁ともいえない彼独特の言いまわしでつぶやく。
「下の世話ばっかりやけどな！ウシャシャシャシャシャ！」
敏男がオヤジ以上にオヤジらしく叫び、またイチゴ牛乳を飲みに行った。
「でも、なんであいつらケンカするんかね？オレは別に三人で仲良くしてもいいのに」
博が罪の意識のかけらもない目で言う。
「ある意味、お前オレよりタチ悪いんじゃない？」
純があきれたように返す。
と、その瞬間、またしても純の携帯電話が音をたてた。
「しつけえな！」
と言って反射的に電話を切った純の顔が一瞬にして青ざめた。
「あ、あ、ああ……」
純は携帯を握り締めたまま、がたがたと震えだした。
ただならない純の状態に息をのむ部員たち。
本当の意味で、重い沈黙が流れた。

が、意を決したように一人の男が口を開いた。
「まさか、今の電話タコ山さんからか？」
うなだれるようにゆっくりとうなずく純。
とたんに他の部員から罵声が飛ぶ。
「どないしてくれんねん！」
「もし、機嫌そこねたらオレら殺されるぞ！」
「ボ、ボクのせいじゃないからね」
「イチゴ牛乳こぼれたやんけ！」
「うるせえ！一番の被害者はオレじゃねえか！！」
と、まるで新しい担任を発表されたときの小学校低学年の児童のように、おのおのが好き勝手に騒ぎ出し収拾がつかなくなった。
だがそのとき、さっきの例を続けていうなら、子供の扱いに慣れたベテランの女教師よろしく一人の男が立ち上がり、厳しい顔で叫んだ。
「静かにせえ！」
その一声で他の部員たちは一瞬だけ我にかえった。
男は勝ち誇ったように全員の顔を見つめ言葉を続けようとした。
「まぁ、落ち着こうや……」
と、言い終わらないうちに今度は全員が一斉に叫んだ。
「えらそうに言うな！！」
そしてまたしても動物園状態。男はもはや完璧に無視されている。
「おーい、みなさーん、ちょっと聞いてーやー・・・」

1話（その5）

「あのう…皆さん、オレの話を…」

すっかり立場の弱くなってしまったこの男こそ、総合格闘部第十代主将、望青空（のぞみあおぞら）その人である。

芸名のような名前だが本名だ。日本中でもベスト１０に入るような爽やかな名前ではないだろうか。

青空本人もどちらかといえば爽やかなお兄さんといった感じのする男ではある

身長１７４センチ、体重７０キロ。マッチョではなく一見するとボクサー体形。

事実、青空はボクシング部では重量クラスの助っ人として重宝がられていた。

シュート・ボクシングもかじっており、それらの真剣勝負では負けたことがない。

しかし四年間彼が専門としていたのは学生プロレスで、そこでは平気で笑いを取ったり八百長試合もしていた。もちろん本気を出したら、プロレス・サークルの学生が再起不能になる恐れもあったからなのだろうが、青空は真剣勝負よりも観客を楽しませることが好きだったようだ。

それでも一応主将に選ばれているのは、クラブの中で一番実力があるということなのだろうが、今の状態を見ると統率力はないようである。

「とにかく静かにせえよ、お前ら！またかかってきたら……」

と、みんなを落ち着かせようとしているのに、ずっと無視されている

「お前らなぁ、主将の言うことがきけんのか！」

「きけるか！！」

えらそうに言ったときだけ、反発をかうことでかろうじて相手にされている。
主将としては情けない限りであるが、それも青空のこれからの行動を見ていると仕方がないことだと思えてくるだろう。
部員たちから無視されつづけた青空は、自分の携帯からリダイアルで電話をかけた。
そして、開口1番、恐ろしく甘えた声で・・・
「あ、ママ、元気だった？もう三時間もママの声聞いてなかったから、ボクチン寂しかったー」
一瞬にして喧騒が静まり、青空以外の部員が眉間にしわをよせる。
「みんなね、ボクチンが強すぎるからヤキモチ焼いて言うこと聞いてくれないのー」
一気にだらしない顔になった青空が甘い声で話しつづける。
また始まったか、というような顔をした博が受話器を取り上げた。
「何すんねん？！返せボケ！」
一転してどすのきいた声で叫ぶ青空。
「ごめん、ごめん。オレらが悪かった。こうしてる間にも、タコ山さんがお前の携帯にかけなおしてくるかも知らんやろ？おとなしく待ってよ、な？」
博がだだっ子をなだめるように言いながら、携帯の電源を切った。
「ま、分かればええんや」
もう一度厳しい表情に戻り、青空は全員を見まわした。
言うまでもなく、部員たちはうんざりした顔をしている。
これがなかったら、結構ええ主将やのに……、基樹が青空には聞こえないようにつぶやいた。聞こえると厄介なことになるのは必至だからだ。
もう説明は要らないかもしれないが、青空は自他ともに認めるマザコンである。
自分でも認めているくせにマザコン扱いをされると手がつけられ

ないほどに暴れる。
童顔殺人者と化している時の博とぶつかり合えば、本当に恐ろしいことになると部員たちはおびえている。
それはともかくとして青空のことだが、これほどまでにひどいマザコンになったのには理由があるらしい。
部員たちも詳しくは知らないのだが、中学のころのある事件をきっかけに青空は変わってしまったそうだ。それまでは地元大阪では知らないものはいない、ヤクザがスカウトに来るほどのヤンキーだったらしい。
さらに複雑なことに、現在の母親はフィリピン人で、本当の生みの親ではないらしい。
共に仲良く暮らせるようになるまでに、複雑な事情があったということなのだが、難しい話を嫌う総合格闘部員は誰もそれ以上の事を聞かない。
それだけに、部員たちもこの件に関してはあまり強いことを言えないようだ。
当の青空も、俺は誇り高きマザコンとして生きると言ってはばからない。
「あー、でもママの声聞いたら家に帰りたくなったな。オレ帰ったらあかん？」
また少しだらしない顔になった青空が誰にというわけでもなくつぶやく。
「アホ、お前主将やろ。ちゃんとタコ山さんから電話かかってきたら出ろよ！」
基樹が怒鳴るように言う。
「えー、何でオレが出なあかんねん？」
「だって、お前主将だろ？オレたちの代表じゃん」
「くそー、お前ら、こういうときだけ主将主将って……」
「主将、後は頼みます、ウヒャヒャヒャヒャ！」
「いつか殺すからな、お前」

「あ、ボクのピッチが震えてる！！」
くだらない会話を続けていた部員たちだったが、健の一言で急に現実に連れ戻された。
机の真中に置いてある健の見た目と真逆の可愛らしい電話が、ものすごい勢いで震えている。
「早く出てよ、望ぃ、また切れちゃうよぉ」
健が情けない顔で言う。
「お前の電話やんけ、イヌ！お前が出ろや！」
「いや、イヌでは頼りない。オレらのためにも望が出た方がいい」
博がきっぱりと言う。部員たちも力強くうなずく。
青空は一瞬ひきつった顔をしたが、意を決したように叫びながら健のピッチを手にした。
「くそー、いつまでもタコ山さんをびびってられるか！！」
ごくりとつばを飲み、不安げな顔になる部員たち。電話がつながったようだ。
「お電話ありがとうございます！同心館大学総合格闘部第十代主将の望青空です！」
先ほどの啖呵はどこへやら、直立不動でがちがちに固まった青空が受話器に向かい叫んだ。
蛸山と言うのはそれほどまでに恐れられている存在らしい。
「はい！……は、はい？？」
青空の両肩から一気に力が抜けた。そしてへなへなと椅子にもたれかかり電話を健に投げつける。
そして、怒りと安堵の入り混じった複雑な表情で、イヌに向かって吐き捨てるように言う。
「……真琴（まこと）ちゃんや、アホ！」

1話（その6）

真琴とは例の健の、おそらくは生涯に最初で最後の彼女の名前である。

緊張していた部員たちがいっせいにずっこける。

「えーっ！もう仕方ないなぁ」

それとは対照的に満面の笑顔となった健が甘えた声で言う。

「何？マコタン？どちたのぉ？」

「おえ、オレ吐き気してきた……」

基樹が席を離れウォータークーラーへと近寄っていく。

それと同時に、またしてもめいめいが好き勝手に口を開く。

「こんな大事なときに……早よ切れ、ボケ！」基樹が切れる。

「すぐ切るよぉ、あ、いいんだよマコタンは気にしなくて！」健は気にしない。

「何がマコタンじゃ！スカタンみたいな顔しやがって！」青空が言う。

「しゅ、主将。笑えないっすー」突っ込む博。

「うん、すぐ帰るから、待っててねマコタン！」

「まったく、どうせつまんねえ女なんだろ？早く切れよ」冷淡な純。

「あ、イチゴ牛乳売り切れなってもた……ホヘー」言うまでもなく敏男。

「うん、じゃあね。電話ありがと、愛してるよマコタン、チュッ」再び健。

最後の行動にはさすがに我慢ができなかったのか、水を飲んで戻ってきた基樹がこめかみに膝蹴りを入れた。冗談のレベルではすまない勢いである。

他の部員たちも、うんうんとうなずく。どうやら同じ思いだったらしい。

「痛いなぁ、何するんだよぉ、素人なら倒れちゃうとこだよ！」
「殺すつもりで入れたんや、オレは」
「ひどいなぁ、平木は……、あ、あれ、もしもし、もしもし、……もう！切れちゃったじゃないかぁ！」
健が基樹にむくれた顔を向ける。まだ話すつもりでいたらしい。
「最後に、マコタンから切ってよぉ、そっちから切ってよぉ、とかやる予定だったのに」
「……今度は眉間にひじ入れられたいか、てめえ？」
怒りに震えた声で基樹が言う。他の部員たちも拳を握り締めている。
「わ、分かったよぉ、ひょっとして…みんなボクに妬いてる？」
「た、頼むからそれ以上言うな。オレたちは人殺しになりたくない……」
「どういうことだよぉ？」
と健が間の抜けたことを言いつづけていると、手の中でまたしてもピッチが震えた。

「あ、マコタンもやっぱり物足りなかったんだぁ」
部員たちの顔が怒りから哀れみのような表情に変わる。
もう、勝手にやってろ！という心境なのだろう。
「もしもーし、マコタン？さっきはごめんね、こちらケンタンでーす！！」

「お前ら、殺されたいんか？コラーッ！！！」

文字を画面いっぱいに広げられるものならそうしたい。
受話器越しに、ラウンジを揺るがすような大声が響いた。
とたんに立ち上がり背筋を伸ばす五人。健はすでに泡を吹いて息絶えている。
死後硬直とでも言おうか、固まった手のひらにはまだ電話が握ら

れたままだ。

恐れていた電話が、最悪な状況でつながってしまったのだ。
そう、電話口の向こうにいるのは、ここにいる部員たちにとっては世界一怖い存在、蛸山朋美（たこやまともみ）その人に間違いない。
蛸山の声は相変わらず大音響でラウンジ中に響いている。
「名月の電話は出たと思ったら切れて、望は話し中、仕方がないから志摩犬にかけたらまたまた話し中、それでも我慢してもう一回かけたら……」
そこで約3秒の沈黙、それでも蛸山の荒い息遣いは聞こえる。冷や汗で練習中よりも多く発汗する部員たち。
「何や！！今のザマはぁあああああっ！！！」
「ひいいいっ、しし、し、失礼しましたぁああ！」
健の手中にある電話にいっせいに頭を下げる五人。
「お前ら、次顔合わせたら覚えとけよ！」
口をパクパクさせて倒れそうになる部員たち。

そのとき青空がしびれを切らしたように、動けないままでいる健の手のひらから電話を奪い取った。
「タコ山先輩！！ぜひ、愛のムチ受けさせていただきたく思います！」
「……望か、お前ぐらいやのお。話がわかるのは」
他の部員たちに少しだけ生気が戻る。
がんばれ、主将！！ウソをついてタコ山さんをなだめられるのはお前しかいない！！
部員たちの胸が、珍しく熱い想いで膨れ上がる。
「ハイ、先ほどは私の携帯が圏外になっておりまして、大変申し訳なく思っております。失礼しました！！」
「圏外？話し中の音やったぞ？」

「は、わ、わ、私の電話はいつでも先輩待ちうけモードです！！」
主将、わけが分からんぞ！やっぱり、アンタは頼りにならん！
部員たちの目が怒りに燃える。
「なんかよう分からんが、今ここで怒っててても仕方ない、今日はちょっと話があるんや」
「は、ハイ！身に余る光栄であります！で、でひお聞かせいただきたくお願いいたしまするであるます！！」
も、もう無理するな。主将！！
ついに涙目になる部員たち。
「あのな、お前ら、今日で引退やろ？」
蛸山はあまり気にかけている様子はない。
「お前らにええニュースがあるんや、リラックスして聞いてくれ」
どうやら怒りのピークは乗り越えたらしい。
ようやく部員たちは意識せずに呼吸できるまでに回復した。
それでも肩が大きく上下している。
誰もが蛸山の言葉に全神経を集中させている。
「卒業後の進路は決まったんか？」
部員たちは顔を見合わせた。

クラブ活動や課外活動（ナンパや飲み会など）に追われ、時間がなかった彼らは就職活動すらしていなかった。進路など決まっているわけがない。
ただし、この理由は本来成り立たない。
彼らと同じようにクラブや遊びに忙しくとも、同時進行で就職活動に励むものなど全国にゴマンといるからだ。
要するに誰一人として将来のことを真剣に考えてはいなかったということだ。
「返事が遅いのう」
「はいっ！！」
蛸山の何気ない一言に反応し、軍隊顔負けのいい返事を返す部員

一同。先ほどまでのだらけた雰囲気を思うとウソのようである。
「誰か就職決まった奴おるか？」蛸山が続ける。
「は、自分はまだであります」
「自分もまだであります」
「自分もです」「私（わたくし）もです」「で、できれば大学院に……ウヒ」
青空が電話口でこたえると次々に口を開く部員たち。
蛸山はその声が聞こえているのかいないのか、マイペースで話を進める。
「そうか、みんな決まってなかったか」
そこで蛸山はいったん言葉を切り、押し殺したような笑い声をもらした。
またしても異常なほどの緊張状態に陥る一同。
いやな予感がする……。
誰もがそう感じた瞬間、受話器ごしに一段と大きくなった蛸山の声が響いた。
「オレがお前らの就職先、決めたろ！！」
ゴクリ。とつばを飲み込む音のハーモニー。

「お前ら……プロレスラーになれ！！！」
「……は？……」
沈黙。混乱。将来。職業。決定。決定？意志。何処？……何故にプロレス？
「返事は？」
「は、はいっ！！」
と、訳も分からず、条件反射で返事をする6人。
「そうかそうか、お前らなら喜んでくれると思った。それでな……」
と、蛸山は満足気な声を出し、今後の予定を一方的に話し出した。
それは提案ではなく、絶対服従の命令であった。
部員たちは、逃れられないことを自覚しつつも、他人事のように

その話を聞いていた。
とにかく今自分たちがすべきことは、蛸山の出す要求の全てに応えていくことだ。
繰り返すが、これは命令なのだ。
まだ梅雨のあけぬ六月の終わり。外では突然の雨にやられたランニング中の空手部が仕方なしのラストスパートをかけていた。
彼らにとって、忘れられない夏が始まろうとしていた…

第2話に続く

第2話　蛸山朋美登場（前書き）

部活を引退したばかりの、同心館大学総合格闘部の面々は鬼と呼ばれた先輩“蛸山朋美”からの招集を受け、とあるプロレス会場に足を運ぶのであった。

第2話　蛸山朋美登場

格闘技の殿堂。

このように形容される会場は古今東西、数知れずある。

あるものにとっては、武道館や両国国技館などの大会場がそうであったり、またあるものは後楽園ホールこそが一番と主張するだろうし、最近ではＮＫホールや川崎球場の名を挙げるものもいるかもしれない。

地域の特性も大きく関係する。

九州の人間なら博多スターレーンははずせないところだろうし、北海道の人々にとっては今はなき札幌中島体育センターの名を忘れはしないだろう。

さて、ここに関西を代表する会場のひとつ、大阪府立体育会館がある。

大阪はミナミの繁華街に堂々と鎮座するこの会場は、中心部の喧騒からは少し外れた場所にあるものの、大阪特有のコテコテベタベタの熱気はそのままに、数ある体育関係の会場の中でも独特な個性を放っている。

メインアリーナの方では、連日大きな大会が催されている。プロスポーツにとどまらず競技人口の多い球技関係の学生大会なども日程に組み込まれており、なかなかの盛況を見せている。

一般の人々がここを訪れる場合は、大体このメインアリーナへと足を運ぶ。

だが本格的に格闘技好きの人間はまず第2競技場の予定をチェックする。

この第2競技場こそが、関西の人間（特にコアな格闘技ファン）にとっての格闘技の殿堂だからである。

ここから未来のスーパースターや、テレビやマスコミが取り上げない幾多の名勝負が生まれるのである。
格闘技を愛するものたちなら足を運ばずにはいられない場所であろう。

さて、そんな第2競技場の本日の予定表には、やはり一般人ならまるで気にとめないようなプロレス団体名が記されている。
ＧａＰａ　（ギャパ）
関西を中心に活動する独立系のプロレス団体で、正式名称は”学生・アマチュア・プロレスリング・アソシエイション”ＧａＰａはその略称だ。
学生という言葉は含まれているが、実際の学生は参加していない。昔は何名かいたらしいのだが、団体が少しずつ認知され始め観客がシビアな戦いを求めることが多くなると、自然消滅という形でいなくなったらしい。
ただ、若干１８歳の少年も選手として参加しているので、その看板（団体名）には偽りなしと関係者は言いきっている。

６年前の冬に、元メジャー団体のメイン・エベンターでＦ・Ｆ・Ｗ世界ヘビー級チャンピオン（現在消滅）にも輝いた経験を持つ、多様な関節技を得意とする実力派レスラー富士山秋吉（ふじやまあきよし）を中心に企画、春に旗上げ。一般人がリングに上がるチャンスのあるプロレス団体として、一応注目された。
しかし、すでに飲酒が原因で身体機能がボロボロの富士山と素人同然の選手たちの試合は、目の肥えたマニアには茶番以外の何物でもなく、団体の存続は旗上げ2年目にして風前の灯となったのである。
そんなギャパを救った男がいる。

当時、大学のクラブを引退したばかりのアルバイトレスラー、現在の”マスク・怒・オクトパス（覆面レスラー）”、本名、蛸山朋美（たこやまともみ）がその人である。
蛸山朋美は同心館大学総合格闘部の第7代目の主将だった。
入部当初、まだサークルのように和気あいあいとした雰囲気のあった部を痛烈に批判。
1回生でありながら、当時の幹部を相手に目隠し組み手を敢行（目隠しをつけた状態でスパーリングをすること、総合格闘部名物のひとつ）。圧倒的強さで全員を秒殺。
以後、部員はほとんど練習に来なくなる。が、総合格闘部の成績は蛸山一人の力で全国的に有名になる。
テレビの取材なども来るようになったが、蛸山は2回生になると取材を全て拒否。
自身も格闘技の大会への出場をやめ、後輩の育成に全力を傾けるようになった。
その蛸山が、現役として最後にかかわった部員が、青空たち、第10代の幹部というわけだ。

そして、その青空たち6人は今、先日の蛸山の電話に従い、指定された待ち合わせ場所である大阪府立体育会館の前に立っている。
全員学ラン着用。彼らにとってはこれが正装なのだろう。見た目に暑苦しい。

「ねえ、もうそろそろ時間だろ？」
薄い髪の隙間を流れる汗を滴らせながら、志摩犬健が懇願するように言った。
「こっち向くなよ、暑苦しい！
指定された時間の5分前に会いに行くのが、あの人に対する礼

儀やろ！
まだ早い！あと5分待て！！」
基樹が直立不動のまま言う。彼らはもう２０分近くこの姿勢を保っている。
「どこで見てるか分からんからな、こうして３０分前に集合して整列しとけば、まず問題ないやろ」
沢下博が自分に言い聞かせるようにつぶやく。
クラブとして参加する大会などがあった時には、彼らはいつもこうして先輩が来る集合時間の３０分前に集まったものだ。
彼らが礼節を重んじるスポーツマンだったからではない。
ただ単純に先輩たち、特に蛸山を恐れていたせいだ。

「でも、久しぶりに学ラン着たら暑いなぁ。ブニョー」
元瀬敏男が心底疲れたような声を出す。
朝剃って来たはずのひげが伸びはじめ、マンガチックな泥棒顔になっている。
ちなみに今は午後2時半前、初夏とはいえ一番暑い時間帯である。
「なー、望ぃちょっとだけジュース飲んできたらあかん？フヒー」
「どうせ、イチゴ牛乳やろが。さっき飲んでたやろ！？」青空が直立のまま返事をする。
「ストックしてたぶんがなくなってん」
「知らんがな。とにかくここにおれ！タコ山さんがもし来たらどうすんねん！」
「ハホホー」
どうやら敏男も納得したようだ。
イチゴ牛乳を飲みたいという気持ちも、蛸山のことを考えると我慢できるらしい。

黙って整列していた6人だったが、少し沈黙が破られたことで次々に口を開き始める。

まず、今日これからのことについて素朴な疑問を口にしたのが名月純だ。
「それにしても、オレたち何させられんだろ？」
続いて健が緊張感の抜けた声で言う。
「プロレスラーになれって、本気かなぁ。
ボク、マコタンから公務員試験受けるように言われたんだけど……」
「おまえはどうなってもええとして、オレは絶対嫌やぞ。
ママを安心させるような仕事につかなあかんのやから」とは青空。
「お前ら、どっちもどっちじゃ、アホ」
二人の間に立っていた基樹が、健の足を踏みつけ青空の脇腹にひじを入れた。
それが引き金となって、沈黙は一気に壊れてしまう。

「オレとイヌを一緒にすんな、ボケ！」
「そうだよ、望には彼女がいないじゃないか！」
「そうゆうことちゃうわ！アホイヌ！」
「黙れ！どっちにしろお前らおんなじ変態じゃ！！」基樹が叫ぶ。
「一番変態はお前だろ？レイコママ？」純が茶化す。
「なんやと、名月。もっぺん（もう一度）言ってみい」基樹が切れる。
「やめとくよ。またレイコママに出てこられちゃ迷惑だし」さらに純。
そのとげのある嫌味な言い方に腹を立てた基樹が、ついに整列していた列をも乱して純に襲いかかる。
「くそお、大体クラブ引退したのに、何でお前らと休みの日まで顔合わせなあかんねん！？」
「それとこれとは関係ねえだろ？相変わらず頭わり悪いな、お前」
「なんやと、こらぁ！？」

「い、今のうちにコンビニ行ってイチゴ牛乳買ってこよかな、ムヒ」
「ちょっと、いいかげんにせえよ。そろそろ時間やぞ」
と、一人だけ冷静だった博が二人の間に割って入る。
「知るか！！文句があるんやったらこいつに言え」基樹が言う。
「オレは何もしてねえだろ、事実を言っただけじゃねえか」純もひかない。
「その言いかたがむかつくんじゃ！」
「ねえ、やめなよう。みんな見てるよ？」うろたえる健。
「そうじゃ、ポリさん（警察官）も来よるぞ」
と言って二人の間に入ったのは青空。
府立体育館の入り口には派出所が建っているからだ。
やはり元主将として、人目につく場所でのもめごとは止めておきたいのだろう。

「お前、関係ないやろ！？」
「いや、一応主将として注意を……」
「誰もお前のこと、主将やと思ってないって」
やれやれ、といった感じで博がつぶやき、ため息をついた。そしてさらにこう続けた。
「ホンマ、付き合いきれんわ。お前ら」
「誰もお前に付き合ってくれって言ってないやろ」
主将の威厳？を壊された青空が怒りをあらわにして言う。
「それに、お前が付き合えるんは女を捨てたうちらのマネージャーだけやないか」とさらに続ける青空。
「ハイハイ。でもお前らよりよっぽどマシじゃ」博は取り合わない。
「……くそ、なんかむかつくわ。お前」簡単に切れる青空。
「何や、やんのか？」そして簡単にのってしまう博。
「もう、やめなってばぁ、みんなカルシウム足りないんじゃない

の？」
と、間に入り騒ぎをおさめようとする健だが、やはり相手にされない。
基樹ＶＳ純。博ＶＳ青空。レフェリー健という図式が出来上がりかけたところで、敏男がのん気にイチゴ牛乳を抱えて戻って来た。
「ホへ？」
のんびり歩いていた敏男が急にイチゴ牛乳を地面に落とし、反り返るほどに背筋を伸ばした。
スケベそうな細い目がこれでもかというほどに見開かれている。
その後で敏男が叫んだ言葉は、言い争っていた他の５人をも一瞬にして彼と同じ状態に変えてしまう。
「失礼します！！こんにちは！！第１０代幹部ここに全員そろいましたぁっ！！」
普段の敏男からは想像もできないような真剣な叫び声が体育館の入り口に響き渡る。
言うまでもなく、敏男が深深と頭を下げたその先には、こめかみを怒りで震わせた蛸山が腕を組んで立っていた。
「……、とりあえず控え室に行こうか？ん？」
蛸山はそう言うときびすを返し、会場へと消えていった。
お互いの顔を見つめあい非難の視線を送り遇う６人。
「早よ来いよ…」
なぜかやさしく響く蛸山の声がいっそう恐ろしげに聞こえた。
……逃げたい。
６人は決して実行できない同じ思いを抱えながら、重い足取りで蛸山の背中を追った。

第2話（その2）

どこをどう歩いてつれてこられたのかは分からないが、次に6人が蛸山と向かい合ったのは、汗のにおいが充満する牢獄のような小部屋の中だった。

どうやら選手専用の控室のようである。

「お前らは、相変わらずやのお」

蛸山が全員を見渡しながらボソリと言う。

身長190センチ、体重110キロ。すっかり大型レスラーと化した蛸山は現役（総合格闘部在籍時）の頃よりもさらに威圧感を増している。

蛸山がギャパというプロレス団体に参加したのは大学4回生の秋。その頃蛸山自身はある製薬会社から内定をもらっていた。なので、ギャパではただ単にリング設営のバイトとして働くつもりだったのだ。

が、いつのまにか若手レスラーのコーチをやらされ、経営者からリングに立つことを強く要請されるようになった。

蛸山はまんざらでもない表情を見せつつも、まだ時期が早いですから……

というわけの分からない言い訳で彼らの誘いをうまくかわしていた。

そんなある日、蛸山は現役レスラーのスパーリングパートナーを勤めている際、軽く入れた膝蹴りで相手のあごを粉々に砕いてしまう。

もちろん控えの選手やリングに立てるほど完成された新人もいな

かったギャパは、ここぞとばかりに蛸山に参加を要求し、蛸山も一応悪いと思ったのか、条件付でこれを承諾した。

その条件というのが、外人レスラーという設定で覆面をかぶることと、いきなりメインで看板レスラーである富士山秋吉（ふじやまあきよし）と真剣勝負をすることだった。

その日のメインは富士山を中心とした2対2のタッグマッチがすでに決まっていたので、経営陣（といっても富士山を入れて3人だったらしいが……）はさすがに悩んだ。

そこで蛸山は乱入することを提案。ま、悪いようにはしませんよ。と妙な自信を見せるこの若者に経営陣はなぜか納得し、全てを蛸山の手にまかせてしまった。

レスラーである富士山までもがそうしたのだから、彼らが蛸山にかけた期待の大きさがどれほどであったのかは想像に難くない。

その後いつものように会場前でただ同然でチケットをさばき、なんとか客を50人近く集めたところでいよいよ試合開始。選手不足で少ししか試合を組めないギャパでは、すぐにメインの時間が来る。蛸山デビューの瞬間だ……。

「お前ら、オレがここでプロレスラーしてること知ってたか？」

物思いにふけっているとばかり思っていた蛸山の口が突然開いた。

蛸山の真正面に立たされていた博が不意をつかれ、思わず正直に答える。

「いえ、全然知りませんでした！！」

言った途端に博の顔が青ざめる。他の部員たちの視線が痛い。

適当に話を合わせて蛸山の機嫌を直さなくては、と感じた志摩犬健が弱々しく言う。

「あの、ボク、一度テレビで拝見しましたぁ」

「……テレビには一度も出てない」
さらに厳しくなった部員たちの視線が健に集中する。
余計なこと言いやがって！という思いが健にささった。

蛸山はあまり気にせず続けた。
「今日はオレに変な気は使うな。望、お前大学でプロレスしてたやろ？」
「ハイ、でもプロレス界についてはまるで勉強不足でした。ギャパのことも名前ぐらいしか……」
「ま、雑誌にもたまにしか載らんしな」
「……」
６人は蛸山の顔色をうかがった。機嫌が悪くなった様子はない。
「オレがここのリングに初めて立ったとき、客は１００人ちょっとしか入ってなかった。
今は組むカードによっては府立体育館のメインアリーナも使えるようになった」
「……あ、マスク・怒・オクトパス！！」
突然何かを思い出したように、青空が叫んだ。
その声の大きさに全員が青空を注目する。

マスク・怒・オクトパス（つまり蛸山なのだが）はプロレスファンにとってはなかなかの有名人である。
技の切れ、スタミナ、体つき、どれをとってもトップクラスで、マスコミからギャパにいるのはもったいないと評価される一線級のレスラーである。

「あれ、せ、先輩やったんですか？」
「……知ってたか？」
「（オクトパスのことは）もちろんですよ！ギャパで有名なんあの人だけじゃないですか

……し、失礼しました。でも外人じゃなかったんですか？確か金髪で……」

「そう、そういう設定にしてたんや……」

ギャパでのデビュー戦、蛸山は金髪の後ろ髪のついたマスクをかぶり目にはカラーコンタクトを装着し、完全な外人レスラーとしてリングに現れた。

タッグ・マッチが始まろうとしていたときだった。

蛸山、いやマスク・怒・オクトパスは一方的に富士山に対戦要求を突きつけた。

富士山たちは蛸山が試合終了後に乱入してくるとばかり思っていたので、本当に面食らってしまい対処に困った。

その一瞬の隙に蛸山は下手な英語で奇声を発し、富士山を除く残りの3人のレスラーをチョップだけでケーオーした。

観客は一瞬あっけに取られた後、異常な興奮状態に陥った。

それだけ蛸山の単純なチョップが説得力十分の強力なものに見えたのだろう。

その重み故に、だまされるのが大好きなプロレス・ファンは蛸山を外人マスクマンとして受け入れた。

それどころか富士山との対戦をあおったのだ。

富士山も久しぶりの熱気のある会場に刺激されたのか、蛸山に全盛期の勢いで襲いかかった。

観客のボルテージがいっそう高まった。

乱入劇は成功だ。―蛸山は富士山のパンチを大げさに浴びながら満足げに笑った。

「……ま、外人レスラーを演じるのは面白かったけどな」
蛸山の静かな声が控え室に響く。
真剣な顔で耳を傾ける部員たち。
「最初は適当にギャパを盛り上げて、本国に戻ったということでプロレスはやめるつもりやったんや。それがなぁ……」

富士山と向かい合った蛸山は最初は彼の打撃技を受けていたが、きいていないと客にアピールし富士山に重いチョップをひとつお見舞いした。
悶絶する富士山。弱小団体に突如として現れたパワー・レスラーに観客はさらに喜んだ。
蛸山としては、この後にしばらく攻め込んで、グロッキーになった富士山に一瞬の切り返し技で関節を決められて敗北するというつもりだった。
つまり富士山をあくまでギャパの頂点に据え、それを狙う外人レスラーの役をしばらくやるつもりでいたのだ。
しかし彼のもくろみはもろくも崩れた。
チョップを食らった富士山が立ちあがってこなかったのだ。
間がもたなくなり、仕方なしにリング上でマッスル・ポージングを決める蛸山。
観客はニュー・ヒーロー誕生を認めた。ギャパの会場としては異様な歓声が沸き起こり、蛸山は一気に看板レスラーの名を背負うことになったのである。
以来、蛸山は本人の意志とは関係なく、ギャパの枠にとらわれず様々な団体の選手と戦いその強さを見せつけなければならなくなった。蛸山のチョップで看板レスラーだった富士山が半年も戦線離脱を強いられたためである。

「……ま、色々あって今までやってきたんや。その実績が認められて来春からアメリカの大きな団体で戦うように要請された。早い話がスカウトやな」
「お、おめでとうございます」
「ま、俺にはやりたいこともあるからずっとプロレスをするつもりはないけど、なんだかんだ言いながらこの世界は魅力的や」
なんと相づちを打てばよいのか分からずに固まる部員たち。蛸山は続ける。
「アメリカに行って、稼ごうと思ってる」
「が、頑張ってください！！」
「問題はここからや」
「……??」
「向こうでは日本人として戦うように要請されたし、オレもそうしたい。ただここでマスク・怒・オクトパスがギャパからすんなりいなくなるとギャパはつぶれると思う。……
そこでお前らに俺の後釜を引き受けて欲しいんや」
「……」
「……いやか?」
「いえ、喜んで！！」
反射的に答えてしまう一同。言ってから悔やんでいるようだ。
「幸い、富士山さんがレフェリーに転向するのが今夜だ。
要するに今日は富士山さんの引退興業なわけだ。
……お前らは富士山さんの最後の弟子たちということで乱入して、オレを6人がかりでめちゃくちゃにしてマスクを剥いでくれ」
「めちゃくちゃに、ですか?」
不安と期待が入り混じった顔で蛸山をうかがう6人。

「お前らオリジナル・ホールド最低一つはあるやろ」ふいに訊ねる蛸山。
「はい、引退稽古で後輩にかけたやつなら……」
「おう、それを俺に思いっきりかけろ！
客の度肝を抜いてからオレのマスクを剥ぎ取れ。
そんで俺のことをうそつき呼ばわりするんや。
それからお前らが新しい時代が来たってなことを客にアピールして一応終わりや」
「ア、アピール……ですか？」
「ああ、まあ適当に考えろ。……それから俺はしばらく再起不能となりリングを遠ざかるという設定、ま、その隙にこそっとアメリカ行って契約済ませてくるつもりや。で、その間にお前らには６人で色々戦ってもらう」
「えっ、プロレスをやるんですか？」
と、プロレスをあまり知らない平木基樹が心配げに言う。

「まあ、普段やってきたガチスパ（色々な格闘技の要素を織り交ぜた実戦スタイルのスパーリング、総合格闘部名物の一つ）見せるつもりでええわ。オレが帰国するまで、まだ何回か会場おさえてるからな、オレが帰ってきたときに戦う相手決めといてくれ。要するに俺の日本での引退試合の相手や」
蛸山の説明を真顔で聞いている面々。それなりに興味津津のようだ。
「決め方は色々や。ファン投票とか、トーナメントとか…設定としてはチャンピオンベルトを持ったままリングを離れた俺を引き戻すための戦いやな。それで俺は俺で、最後のプライドをかけてお前らの挑戦を受けて戦うが、新しい力に敗れベルトを手放して日本を離れるという予定や」蛸山が続けて言う。
話を黙って聞いていた沢下博が驚いたように言う。

「八百長で蛸山さんに勝つわけですか？」
「結果的にはそうやが、それやとお前らやる気出さんかも知らんからなあ…」
と言って、蛸山朋美は一同をじろりと見まわした。
ゴクリ。と唾を飲み込む６名。
蛸山は十分意味のある沈黙の後、口を開いた。
「優勝者には俺と真剣勝負ができる特典付きや。本気で今のお前らとサシで勝負したる。……どや？」

その言葉『真剣勝負』が空気振動となり、各々の鼓膜を震わせた刹那である。
―６人の顔つきが変わった。―

今度は恐怖や怯えているといったものではない。挑戦者の顔になっているのだ。
全員の表情が珍しく引き締まっている。
ということは、彼らは皆、あれほど恐れていたにも関わらず蛸山との真剣勝負を望んでいるのだろうか。
誰もが不遜なまでの自信をその瞳にみなぎらせ、蛸山の目を一直線に見つめている。
『先輩と戦うのは自分しかいません！』
言葉には出さないまでも彼らの顔はそう言っていた。

「不満か？」見透かしたように蛸山がつぶやく。

「ぜ、ぜひ！やらせてください！」
誰からともなく口を開いた。その言葉は重たく控え室に響き、場の雰囲気がより一層張り詰めたものとなった。

ま、最後は俺がベルト奪われなあかんけど、寸前までは本気で相

手したる。
せいぜい、死ぬなよ。と蛸山は笑って付け足した。
６人の目は一切笑わない。
そんな彼らを見て、蛸山はますますおかしくなり大声で笑い出した。
「お前ら、ほんまに相変らずやのう・・・」
蛸山は満足げな表情で、自分を睨みつける野獣の目をした後輩たちを、じっと見詰めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4133ba/

ドラマティック・ファイティング・クラブ！　（プロレス小説）

2012年1月12日22時52分発行